

## 第4学年社会科における「意味と内容」のひろがり

4年A組 片桐 宏

### —題材『ほんまもん和歌山！「伝統の業（わざ）」』の学習をとおして—

#### 1. 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

和歌山県の学習の中に、伝統工業の学習をどのように位置づけるかが大きな課題といえる。伝統工業の学習に単独で取り組むのではなく、和歌山県の特産物（地場産業）の一つであるというとらえ方で伝統工業を考えることにした。まず、和歌山県の特色をとらえた特産物、人物、文化、歴史などに目を向けさせた。テーマは、「ほんまもん和歌山！」。この共通のテーマに対して、子ども達は自分の調べてみたい課題を設定し、その課題に向かって追求をはじめた。その中で和歌山県内の特徴ある特産物の一つとして、「紀州漆器」を調べる子ども達がいた。その子ども達の発表から、この単元がスタートしたのである。

和歌山県に生きる人々のくらしや営みは、時代の流れとともに刻一刻と変化してきている。和歌山県の伝統工業である「紀州漆器」も例外ではない。生活環境の近代化が進み、人々の生活が便利になった反面、多くの問題が生じてきたのも事実である。生活環境の変遷や時代の流れにうずもれることなく、現在も生産を続けている伝統工業のもつ価値は大きいといえる。

最盛期に比べて衰退しつつある「紀州漆器」産業の中で、古くからの伝統の技を今も継承しながら「紀州漆器」をつくり続けている人々の工夫や努力（願いや思い）を知ることを通して、「紀州漆器」（伝統工業）の現在の姿を鮮明に映し出したいと考えた。

そこで、本単元の目標を次のように設定した。

◎古くから伝わる技術を今に受け継ぐ伝統工業のよさ・人々の思いを追究する。

（追究を高めるための、まなざしの共有とひとり学習）

- 県内に見られる伝統工業についての関心を高め、調べようとする意欲をもつ。
- 「紀州漆器」について、その業（わざ）を受け継いでいる人々の工夫や努力、思いについて考え、地域に根ざした生産をおこなっている伝統工業のよさについて考える。
- 「紀州漆器」のつくり方を見学・体験したり、資料で調べたりして、それらをもとに「紀州漆器」のよさを他者に伝えることができる。
- 「紀州漆器」のつくり方を調べ、地域の自然的・社会的な条件を生かしながら伝統を守り発展してきたことを理解する。

本単元では、数少なくなった伝統工芸士（漆塗り）である谷岡さんを中心にスポットをあてた。古くから地域に伝わる伝統工業にかかわっている谷岡さんの、こだわりや思いに寄り添っていくことで、子ども達が伝統工業を事実に基づいて、多角的・多面的・総合的に見つめられる機会になればと願った。また、単元全体を通じて伝統工業などの地場産業そのものの意味や役割を考えるようにするとともに、それらが今日まで根づいている地域の特色や、伝統工業を守り継承している人々の努力、固有の風土などについてもとらえさせたいと考えた。

## 2. 4年生の子どもがとらえた「意味と内容」

社会科で考える「意味と内容」とは、社会生活の中で人間の生き方にかかわる考えや人間の生きざまを知ること、社会の仕組みを正しく見つめることができ、自分ならこのようにすると考えを深めることである。大単元「ほんまもん和歌山！」では、和歌山県の学習を通して、各個人・グループで興味や関心に応じた課題を調べ、その調査結果をみんなに発表することで学習がはじめられた。子ども達一人ひとりに自分の課題が生まれ、追求の対象となり、かかわりながら学習がすすめられた。調べていく道筋の中でも新たな課題が生まれ、自分の力で対象に向かい考えていく中で、一人ひとりの社会的対象に対する「意味と内容」がひろがっていった。

本単元では、「紀州漆器」グループの発表をきっかけに伝統工業の学習がスタートした。学級全体としての課題に対して、「ひと・もの・こと（和歌山の特色を生かした）にせまろう！」のもとに、一人ひとりの問題が生まれた。「紀州漆器」を見学し、蒔絵体験をした後も同様である。

「社会の仕組みをとらえる」ということは、社会的対象の過程や背景を「ひと・もの・こと」との関わりにおいてとらえるということである。子ども達は見学を通して、伝統工芸士（漆塗り）である谷岡さんの仕事ぶりに触れ、谷岡さんの生き方や「紀州漆器」に対する思いや願いやこだわりを自分なりに追究していった。その追究を深めながら、現在の「紀州漆器」の実情や今後の展望などを広く考えることで、伝統工業のよさを知るとともに、伝統工業に対する「意味と内容」がひろがるのであると考えた。今回見学した谷岡さんは、「紀州漆器」の数少ない「塗り師」で、プラスチック製品のように大量生産を考えるとなく、近代化の波にもまれながらも、伝統的な手法で「紀州漆器」を守っていきこうとしている人である。谷岡さんの「塗り師」としての姿を見て、高度な技術だけに目を向けるのではなく、谷岡さんの工夫や苦勞を考えると「紀州漆器」にかける思いや願いをつかませたいと考えた。また、谷岡さんだけではなく、多くの漆器関係者が伝統工業の「紀州漆器」を存続させるために、現在も努力している事実にも触れさせたいと考えた。伝統工業に携わる人々の生き方や考え方を知る中で、地域に根ざした伝統工業のよさやすばらしさを追究させたいと願った。

## 3. 「意味と内容」がひろがる場面

### (1) 単元全体の学習の流れ（15時間＋みらいの時間）

第1次 どうして「紀州漆器」は、約500年間も続いているのだろうか？（4時間）

・「紀州漆器」グループからの発表。

第2次 黒江の町探検。 “漆器のひみつをさぐろう！” （6時間）

・漆器についてみんなで調べよう。

・谷岡さんの工房を見学し、紀州漆器伝統産業会館で蒔絵体験をしよう。

第3次 谷岡さんの「紀州漆器」にかける思いや願いを中心にしながら、（2時間）

「紀州漆器」の今後を考えてみよう。

・「紀州漆器」の将来について考えよう。

第4次 谷岡さん、「紀州漆器」がんばれ大作戦！！ （3時間＋みらいの時間）

・谷岡さんや「紀州漆器」を応援しよう。

### (2) 学習の実際

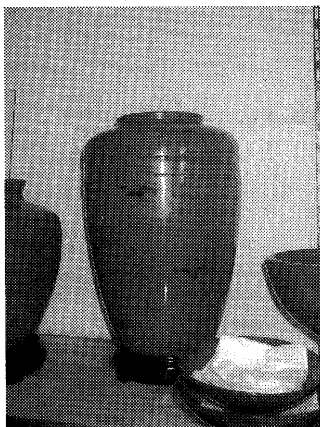
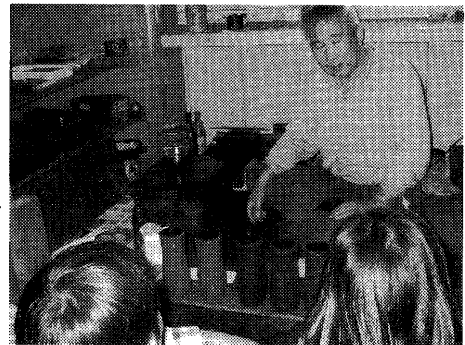
第1次は、『ほんまもん和歌山！』の特産物を調べた子ども達の発表から学習がすすめられた。調べる・まとめる時間を学校で確保したが、できない場合は家庭学習にした。もちろん他の農業・

水産業・観光の子ども達も同時進行で活動した。調べる手段・方法として「図書の本」「和歌山ガイドブック」「インターネット」「ひらけゆく和歌山」が主であるが、休日を利用して様々な方法で調査する子も多かった。「本の字まんじゅう」を調べた子ども達は、自宅近くの駿河屋さんに何度も足を運んで、聞き取り調査を行っていた。この発表を聞きながら、子ども達は少なからず「まなざしを共有」している。一生懸命に自分の調べたことを伝えようとする子、自分たちの住んでいる和歌山県の特産物のことを、しっかり聞きながら知ろうとする子の姿があった。発表の後、みんなで調べる和歌山県の特産物の一つ決めた。どの特産物も歴史のあるものであるが、伝統工業という視点から「紀州漆器」を全員でもっと深く調べることになった。見学までに、一人ひとりが様々な方法で「紀州漆器」の歴史、工程、漆などを調べ、疑問点を出し合った。家から大切な「紀州漆器」をもって来る子も多く、教室内の棚に並べられた。子ども達からは、「紀州漆器」は伝統工業であること、伝統工業とはプラスチック製品ではない手づくりで、製造にかなりの時間や手間がかかる等の意見が出された。

第2次は、「紀州漆器」と海南市黒江の町の見学である。伝統工芸士の谷岡さんの工房を見学した。ヒノキの木地にこだわり、伝統的な手法で現在も「紀州漆器」をつくり続けている谷岡さんと触れ合い、「漆塗り」の作業を目の当たりに見る中から子ども達は多くのことを感じ取った。

子ども達の感想の中には、「昔から（100年前）の道具を使っていた。」「うるしを大切にしていた。残らず使う。」

「とても真剣な顔をしてくるしを塗っていた。」「漆器をとても大切にしている人だ。」「道具を使い終わると、ていねいに道具をかたづけしていた。」「とても楽しそうに仕事をしているように思えた。きっと漆器のことが好きな人。」というように、谷岡さんの「漆塗り」に対するこだわりに迫る内容も多かった。谷岡さんの工房の見学の後、「蒔絵」の体験を行った。徒歩で移動の途中、黒江の町並み（のこぎり状の家屋）を見学しながら、紀州漆器伝統産業会館に到着した。「蒔絵」体験教室では、「作家」と呼ばれる芸術家の山田先生が指導してくださった。もちろん谷岡さんの工房で見た本物の「紀州漆器」ではない。漆の代わりに「カシュー」、木の代わりに「プラスチック」製のお盆である。子ども達は、そのことをわかっていて、「カシューは、15分で乾くのか。漆とえらいちがいがいや。」と声をあげていた。二つを比較して知ることによって、「紀州漆器」に関する「意味と内容」がさらに深まった。また、1階に展示されている「紀州漆器」を見学することで、漆器製品の美しさや種類の多さ、「紀州漆器」の現状を把握できた。



見学後の週末に「紀州漆器まつり」が開催されるので、参加できそうな子に声をかけてみた。結果は、学級の3分の1にあたる12名が「漆器まつり」に参加していた。その中には、漆器関係の人に聞き取り調査をする子やもう一度「蒔絵体験」をした子もいた。自分のお金で漆器を買った子もいて、漆器にかなり興味をもったようである。その後、見学したことをもとに「ひとり学習」で自分が深く調べたことや考えたことを発表しあった。「紀州漆器」の歴史、プラスチック漆器、原料の漆のことなどを詳しく調べている子もいた。漆器の生産高の推移をグラフに示してきた子もいた。日数が少なかったことで、調べられない子もいたが、友達の考えを聞きながら自分の考えを深めていた。調べられなかった子にとっても、「まなざしの共有」ができていた。意見交換の中で、みんなで調べられ、話し合える共通の課題を考えさせた。

第3次では、谷岡さんの生き方や「紀州漆器」にかかる思い・願いについて深く考えながら、

「紀州漆器」の将来を展望する話し合いをおこなった。「ひとり学習」の結果、子ども達の考えは、「伝統工業の紀州漆器は、今後は続かない。」が多かった。その根拠として、売り上げが減少していること、安価で手ごろなプラスチック製の漆器が主流の現実があること、「紀州漆器」の「塗り師」は谷岡さんだけで、後継者が今のところいないという点などがあげられた。しかし、人数が少ないが、「今後も続く。」という考えもあった。その考え方は、谷岡さんの思いや願いにまで考えが及んでいる場合で、谷岡さんがどんな思いや願いをもちながら50年間も「紀州漆器」をつくり続けているのか、どんな気持ちで漆を塗っているのか、という視点を大切にしたいものである。討論形式で学習をすすめる中で、結論はでなかったが、子ども達なりにしっかり考えた意見の交流が見られた。子ども達相互の「まなざしの共有」が深められる中で大切にしたいかったのは、子ども達に、今後も「紀州漆器」を存続させよう、存続させたいということに目を向けさせる点である。話し合いの中で、「谷岡さんがつくれなくなっても、誰かが後継者になる。」「貴重な漆器は、きっと残る。」といった「紀州漆器」のもつ伝統のよさ・職人の技術のすばらしさに関する考えも多かった。また、谷岡さんだけではなく、多くの漆器関係者が伝統工業の「紀州漆器」を存続させるために現在も努力している意見も出された。伝統工業に携わる人々の生き方や考え方を学ぶ中で、「今後は続かない。」と考えていた子ども達の心の中にも、「今後も発展してほしいな。」という願いが強くなったのも事実である。

第4次では、谷岡さん・「紀州漆器」を、子どもなりに応援する方法を考えた。「パンフレットをつくって各地に送ろう。」「ポスターをつくって駅にはってもらおう。」という意見も出たが、話し合いの結果、谷岡さんや漆器伝統産業会館にお礼の気持ちをこめて手紙を書くことと、グループごとに漆器壁新聞をつくることになった。手紙や壁新聞の内容は、単なるお礼やまとめではなく、子ども達なりに「紀州漆器」の将来を考えたものであった。伝統工業を存続させるために努力している人々に対する思いがますます深まった取り組みになった。後日、手紙と壁新聞を谷岡さんの工房と、紀州漆器伝統産業会館に届けたところ、とても喜んで掲示してくれた。



#### 4. 成果と課題

単元目標である「伝統工業のよさ・人々の思いを追究する」という点から考えると、谷岡さんの工房の見学や蒔絵体験はとても効果的であった。谷岡さんの「漆塗り」をする姿を見る中で、谷岡さんの「紀州漆器」にかかる思いや願いを感じ取ることができた。子ども達は見学を通じて、谷岡さんの生き方にも触れながら、伝統工業のすばらしさ、伝統工業を受け継いでいる人々の工夫や努力を把握できたと考える。このことは、単元全体を通しての「意味と内容」がひろがり、子ども達の伝統工業に対する見方や考え方がさらに深まったといえる。

本単元では、「紀州漆器」の見学が中心にすすめられたが、学習の流れや学習課題づくりがやや指導者主導になったと考えている。もっと子ども達の興味・関心を前面に出して、学習展開を組み立てる必要がある。子ども達に寄り添って考えることを大切にしたい。また、話し合いの場面では、多くの意見や考えが交わされているが、どうしても発言力の強い子ども達の意見に流されてしまうことが多い。あまり発表をしない控え目な子ども達も、「ひとり学習」ではしっかりと自分の考えをもっている。「全体学習」の場で、できるだけ発言できるように配慮したい。そのためには、「ひとり学習」にもっと重点をおく必要があると感じている。学習対象に出会い、様々な疑問をもちながら自分で課題を見つける「ひとり学習」を工夫したいと考えている。子ども達一人ひとりの「まなざしを共有」するという視点からも大切に組み込んでいきたい。